

# 生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月の  
ピックアップ

はんげ  
半夏

## ハンゲとは・・・

カラスビシャク： *Pinellia ternata* (サトイモ科) のコルク層を除いた塊茎 (かいけい) のことです。中国、朝鮮半島から日本にかけて雑草としてあちこちに分布しています。

植物自体の特徴は、ひしゃくのように広がった花とその先端が黒く着色していることからカラスビシャクと名付けられたようです。

ちなみに、『へそくり』という言葉の由来も、実はハンゲが関係しています。ハンゲはそのくぼみを臍に見立てて『へそくり』 (= 臍栗) と呼ばれていました。農家が仕事の合間に畑の雑草カラスビシャクを掘り、薬屋に売り小遣いを稼いでいたことから、ハンゲで得たお金ということで『へそくり』と呼んだという逸話があります。

【薬能】 降逆止嘔、燥湿化痰

【性味】 辛、温、有毒



## ハンゲの成分と薬理作用・・・

ハンゲに含まれる成分として、アミノ酸類、脂肪酸類、多糖 (デンプンなど) や、フェノール類であるホモゲンチジン酸や 3,4-ジヒドロキシベンズアルデヒド、シュウ酸 Ca 針晶などがあげられます。

薬理作用は、制吐作用、胃潰瘍抑制作用、血清コルチコステロン濃度上昇などが明らかになっています。漢方の視点では、和胃降逆の効能から胃気逆による悪心、嘔吐などに用いられ、さらに止咳の効能により喀痰の生成を抑制するので湿性の咳やタンによく用いられます。

## ハンゲのイガイガ・・・

ハンゲをそのままかじると大変なことになります。少量食べるだけでも、のどに強烈な痛みを覚え、強いえぐみを感じます。これは前述しました、3,4-ジヒドロキシベンズアルデヒドやシュウ酸 Ca の針状結晶などの影響とされています。実はこの症状は生姜 (ショウガ = ショウキョウ) を一緒に食べることで、不思議なことに幾分か改善されます。生姜にはハンゲの毒性を消して薬効を発揮させるという作用もあるため、ハンゲと共に生姜が処方されているケースはよく見られます。このような関係は『対薬 (たいやく) 』と呼ばれ、他にも茯苓 (ぶくりょう) と白朮 (びやくじゅつ) や、白朮と蒼朮 (そうじゅつ) などとも同じように対薬と呼ばれます。

## ハンゲが含まれる方剤・・・

うんけいとう

**温経湯** (手足がほてり唇が渇くものの月経不順、月経困難、更年期障害、不眠、足腰の冷え)

はんげこうぼくとう

**半夏厚朴湯** (気分がふさいで、咽喉・食道部に異物感を伴う不安神経症、神経性胃炎、つわり、咳など)

よくかんさんかちんぴはんげ

**抑肝散加陳皮半夏** (虚弱な体質なものの神経症、不眠症、小児夜泣き、更年期障害、血の道症など)

りっくんしとう

**六君子湯** (胃腸のよわいもので疲れやすいものの胃炎、消化不良、食欲不振、嘔吐など)

## ハンゲは毒・・・？

ハンゲは、日本では比較的馴染みのある生薬で、半夏瀉心湯や半夏厚朴湯など、方剤名の頭にハンゲと名の付くものがたくさんあり、頻繁に使用されている印象があります。一方で、中国では扱いが全く異なります。中国の生薬市場に行くと、大きな麻袋いっぱいの生薬が陳列しており、買い手がすぐに生薬を手に取りその品質を確認できるようになっています。しかしハンゲはそれとは異なり、お店の人をお願いして店の奥からサンプルを持って来てもらわないと品質の確認ができません。なぜ日本と中国でこれほどまでに扱いが違うのか、これは、中国ではハンゲは毒薬として扱われているからです。不思議な差異ですね。

## ハンゲの種類と使い道・・・

ハンゲの流通規格は、中国産では甲級、乙級、丙級、丁級、珍珠半夏（ちんじゆはんげ）、小珍半夏（しょうちんはんげ）があります。ハンゲは煎じる際に「砕」や「片」といういわゆる“刻み生薬”の形で使用されます。この時、甲級や乙級などの大粒はスライスして「片」として使用されます。ハンゲは前述したとおり、デンプンを多く含む生薬です。家庭で煎じる際にはデンプンが抽出しすぎる、というようなことはありませんが、エキス剤（ツムラやクラシエなどの製薬会社が作る顆粒の漢方薬）などを作る際には、このデンプンの含有量が問題となってきます。

甲級↓ 乙級↓ 珍珠  
半夏↓



ハンゲはサトイモと同じような“イモ”なのでぐつぐつと煮込むと煮崩れてドロドロになってしまいます。その結果、ハンゲに含まれるデンプンの抽出量が多くなってしまいます。一方で珍珠半夏でエキス剤を作ると、切断面が水に接することなく、表面積が小さいためデンプンの量を抑えたエキス剤を作ることができます。用途によってどの種類の生薬が適しているのかを知るのも大切です。